

聖書：第二サムエル記3章1～11節

説教：主が誓われたことならば

1 分裂したイスラエル

イスラエルはもともと一つの国でしたが、今は二つの王が立っています。一つは北イスラエルを治めているサウルの家。戦いで倒れたサウルの四番目の息子であるイシュ・ボシェテが王です。将軍アブネルがイシュ・ボシェテを支えています。

いっぽう、ダビデはイスラエルの南側に位置する南ユダ地域を治めております。1節にもあるように少しずつダビデのほうが強くなってきておりますが、一つの国にまとまるまでには至ってはいません。両者の間で戦いが続いています。

アブラハムが約束の地カナンに足を踏み入れたとき、主は「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と約束されました。そのようにして与えられたのがイスラエルです。そのイスラエルが二つに分かれ、王座を巡って戦いを繰り返しています。神の国であるのに、争いが起きるのです。不思議に思うかもしれませんが、イスラエルは、確かに神が与えてくださった約束の地ではあるけれど、理想の王国が最初からそこにあったのではありません。そこには罪を抱えた人たちが住んでいるのですから、いろいろな問題が起きるのは当然で、神は初めからそのようになることはご存じです。神は忍耐強く関わり続け、時間をかけて神の御心を成し遂げようとされます。それがイスラエルの歴史として聖書に記されているのです。

2 イシュ・ボシェテ王

さて、イシュ・ボシェテは王という立場にはありますが、実際の権力を握っていたのは軍隊の力を背景にしていたアブネル将軍です。これだけで、両者の力関係が非常に微妙なものであったことは想像ができます。

当然イシュ・ボシェテはおもしろくありません。なんとか自分が優位に立たなければと焦ります。そこで、あるとき彼はアブネルにこう言います。7節。「あなたはなぜ、私の父のそばめと通じたのか。」

この言葉を読んでびっくりする方もいるでしょう。それだけではない。2節以降には、ダビデの妻たちの名前がずらりと載せられています。ここで数えただけでも六人はいます。聖書では正式の妻ではない女性と結婚するのは許されているのか。疑問になるかもしれません。

もちろん聖書の原則は、一夫一婦制です。いっぽう、アダムとエバ以来、人は罪の中で生きざるを得なくなりました。考えてみると、私たちだって聖書の理想とはかけ離れたことをして、それでも平気で生きています。例えば、世界には満足に食べることができず、飢えで苦しんでいる人が十億人いると言われます。いっぽう、私たちはあふれるほどの食料に囲まれ、満腹するだけ食べています。考えてみれば奇妙なことです。でも、ただちに罪であると指摘される訳ではありません。それと同じではないでしょうか。

神は、もちろんこのままでよいと思っておられません。数千年という時間をかけて少しずつ変えていきます。ダビデの結婚のこと

は、神の理想の状態とはかけ離れているかもしれませんが、ここでただちに問題とされているわけではありません。アブネルのことも同じです。当時は前の王様が死んだら次の王様がそばめを自分の妻とすることは自然な習慣であったと言われていました。ですから誤解しないでください。イシュ・ボシェテは、アブネルが不道德なことをしている言っただけで責めているわけではありません。彼が言いたいことは別のことです。「自分こそ正当な世継ぎである。父のそばめをもらい受ける権利があるのはおまえではなく自分である。それなのにおまえはサウルのそばめを自分の妻とした。」 そう言いたいのです。

3 将軍アブネル

1) 「ユダの犬のかしら」とは

これに対しアブネルは次のように言い返します。8節。「この私が、ユダの犬のかしらだとしても言うのですか。今、私はあなたの父上サウルの家と、その兄弟と友人たちとに真実を尽くして、あなたをダビデの手に渡さないでいるのに、今、あなたは、あの女のこと私をとがめるのですか。」

アブネルの言っていることは嘘ではありません。先週も見ましたが、ダビデ軍との戦いではいのちの危険にさらされることもたびたびでした。サウルの家のために一生懸命努力してきたのは事実です。ところがイシュ・ボシェテはそのことを正しく評価せず、かえって「おまえは勝手なことをして」と叱りつけたのです。アブネルが頭にきたのは当然でしょう。

アブネルが言った、「ユダの犬のかしら」に目を留めたいと思います。「犬のかしら」とは「教養のない者」とか「愚かな者」くら

いの意味でしょう。また、「ユダ」はダビデが支配している地域になりますから、これを言い直せば、「自分は、南ユダの愚かな将軍なのか」ということになります。もちろん、アブネルは北イスラエルの将軍であって南ユダの将軍ではありません。では、なぜこんな言い方をするのか。イシュ・ボシェテから痛い所を突かれたので、とっさに「ばかにするな」と叫んだ、そんな意味でしょうか。でも聖書には意味のないことばは一つも書かれていません。いったい、アブネルは何を言いたかったのか。次にそのことを考えていきます。

2) いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか

鍵となるのは、9、10節のことばです。「主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私が彼に果たせなかったなら、神がこのアブネルを幾重にも罰せられますように。サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるということを。」

私はここを読むとき、今でもそうですが読み違えたのではないかと思うことがあります。ひとこと言え、イシュ・ボシェテを見限って、反旗を翻したということです。これはクーデターです。ところがイシュ・ボシェテは力が弱く、アブネルを押さえ込むことはできません。

アブネルは、いまサウルの家を離れてダビデの家に寝返ろうとしています。敵と味方の二つの内から自分にとって有利なほうを選ぶ、それがこの世の常識、アブネルもこの原則で行動したのか。

この先を読むとわかりますが、イスラエルが一つまとめられていく大きな転機となっ

たのが、このアブネルの言葉です。それくらい重大な瞬間に語ったことばです。アブネルが、愚かな王様であるイシュ・ボシェテを見限ったという単純な話ではありません。アブネルの言葉の中に、神の御心が働いているものと考えるべきでしょう。

彼がこう言っていたことを思い出していただきたい。2章26節。「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。いつになったら、兵士たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れ、と命じるつもりか。」

これまで敵と味方と別れて争ってきたけれど、いつまでもこんなことが続いてよいわけがない。和解して兄弟どうしとなり、ひとつとなりたい。それがアブネルの願いでした。

そうしますと、アブネルはどうすべきでしょうか。世の戦略家たちが考えるように、アブネルがダビデに寝返り、サウルの家を裏切る、もしそのように行動したらどうなるか。二つが和解することなどありえません。力の強い者がのし上がる世界がまた繰り返されるだけです。だから最初に言うのです。「この私が、ユダの犬のかしらだとでも言うのですか。」もし、サウルの家を裏切るなら、自分はユダの犬のかしらになってしまうだけ。そんなことをしても何の意味もない。

アブネルが考えていたことはまったく別ことです。ダビデが全イスラエルの王となる時、サウルの家はどうなるのか。サウル一族を徹底的に滅ぼすような「お家取りつぶし」が起きるのではない。必ず和解していく。お互い敵同士となっていがみ合う関係ではもはやなくなる。それが神の御心であることを確信し、行動を起こしていきます。

4 キリスト

自分のことをふり返れば、この人は自分の味方であるのか、それとも敵であるのか。人を見るとき、いつもそんな目で見ていることに気がつきます。私は正しくて、あの人は間違っている。常に、自分を正当化するための言い訳を考えています。

「互いに愛し合いなさい。」「あなたに負い目のある人たちを赦しなさい。」そう言われます。もしそれができていたのなら、この世界はもっと住みやすいものになっていたでしょう。でも、そうなることはありません。依然として人が人を憎む状態が続いています。

神は何もなされないのでしょうか。いいえ。神はすでにしておられます。エペソ書2章14、15節にこうあります。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」

アブネルは、イスラエルの行く末を見届けることはできませんでした。憎しみの刃に刺され、道半ばで倒れていきます。自分が犠牲となって、二つのものを一つにしようとしてしました。アブネルのことをとおして、キリストの姿が浮かび上がってくるように思います。

自分の目で見ることではできませんでしたが、アブネルは確信していました。主がダビデに誓われたとおりのことを、必ず成し遂げる。そして、そのとおりにイスラエルの歴史は進んでいきます。

私たちも、結果を見ることなく道半ばでこの世を去るのかもしれませんが。でも、主は、すべてのことを約束のとおり完成させると誓ってくださいました。私たちはそのことを待ち望みながら、また一步踏み出していきたいと願います。